



水城の渡し跡

老松神社

西鉄下大利駅

ひともご山路

第2広場

水城大堤碑

水城展望台

妙見祠

東門礎石

塞ノ神

木樋取水口

姿見池

衣掛石

衣掛天神

水城瓦窯跡

御登川

JR水城駅

父子島

木樋取水口

西門跡

西門礎

古漢大明神

水城院跡

観音堂

島本遺跡(官道跡)

宝満神社

天神の森跡

# 歴史の道

— 水城跡のすべて —

0 500m

# 歴史の道

## 水城跡のすべて

### 水城跡



663年8月に唐・新羅連合軍に白村江の戦いで敗北したため、唐・新羅の来襲に備えて、天智天皇3(664)年に築造された土塁で、現存の堤防は高さ13m、幅約80m、全長1.2kmに及んでいる。博多側には幅60m、深さ4mの外堀が確認され、内堀の存在も推測されている。日本書紀には「天堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ」と記されている。

### 老松神社



江戸時代から地誌類にみられるが、創建年代は明確でない。本殿の石祠は1867年の建築されている。御笠川渡岸には菅原道真が上陸したと伝わる水城の渡し跡の石段が残る。

### 水城東門跡



県道112号線が水城跡と交差する付近には、東門があったと考えられている。平安時代中期の歌人藤原高遠が詠んだ和歌には「岩垣の水城のせきに群むかふうちこのころもしらぬ諸人」(夫木集)とあり、石垣を伴った城門であったことが想像される。

### 塞ノ神



御神体は木造男根で、性病に関する民間信仰がある。昔、福岡藩の武士が娘を連れて宰府詣りをして、この堤まで来た時、娘がしきりに男を恋しがって歩かなくなり、武士の娘にあるまじき腰つきをするので、父親は娘を斬り亡骸を木の下に埋めた。里人は娘のためにこの堂を建て、霊を祀ったとされる。

### 水城大堤之碑



大正4年11月大正天皇の御大典の記念事業として水城青年会の発案によって大正5年5月に建設された。表面には、水城村出身の技手竹森善太郎が実測した水城跡の実測結果が刻まれている。

### 東門礎石



礎石は、240×80cmの長方形で、礎石上面には円形や方形の門柱や軸受けの穴が掘り込まれている。方形の穴は扉と門柱との隙間を塞ぐ方立を据える穴である。江戸時代には「鬼の硯石」ともいわれていた。

### 東門展望所



大野山(四王寺山)の尾根や水城跡に取り付く部分に設けられた展望所。ここからは、水城土塁の延長上に背振山があること、高速道路が水城跡より低く建設されていること、そして、都市化の波にもまれる水城跡を眺めることができる。

### 東門木樋跡



1930年に発見され、調査によって大堤の直下に延長79.5mにもおよぶ木樋が敷設され、大宰府側にはT字形の取水口とみられる施設が設けられたことがわかった。木樋はヒノキ材の底板2枚と側板、蓋板とからなっており、内法で幅1.2m、高さ80cmを測る。

### 水城瓦窯跡



8世紀中頃と考えられる瓦窯です。窯の構造はロストル式の平窯で、登り窯が主流であった九州において珍しく、都でみられる平窯を用いている。「続日本紀」に天平神護元(765)年、采女朝臣浄庭が水城修理専知官に任命されたと記載され、その関連が指摘されている。

### 木樋跡



1990年11月発見された木樋跡。木樋本体はすべて抜き取られていたが、木樋と交差する取水施設を固定する柱と底板を支える枕木及び底板の勾配を調整したためのものとみられる模状の木材が遺存していた。

### 西門官道跡



奈良時代、大宰府条坊の南辺から、道幅11m前後の道路が水城を横切り、筑紫館(のちの鴻臚館)に向かって続いていたと考えられている。調査でも断片的に確認され、水城西門付近では現在でも畑や宅地割として残されている。

### 西門礎石



西門近くの土塁上に大きな礎石が移されている。礎石には方立や扉の軸受けの円形影り込みがみられる。その他にも西門近くの住宅の石垣に使われた礎石も見ることができる。

### 水城西門跡



現在も西門があった頃と変わらない狭い切り通しとして残っている。築造当時は掘立柱の門だったとみられ、径52cmの柱が残っていました。その後奈良時代に礎石を用いた門に建て替えられている。また、土塁際には石垣が見つかった。

### 水城院跡



大陸山水城院は、大正13年に日蓮宗の僧侶である高鍋日統が中心になって建立した寺である。その建立目的は大陸発見海外雄飛大重信交の道場とするものでした。戦後山号を天照山に変え、太宰府天満宮から東法華堂を移築し本堂とした。高鍋日統死後、水城寺と改めたが、まもなく廃寺となり、現在は雑木の中に石段や門柱を残すのみである。

### 父子島



JR鹿児島本線の西側の低丘陵には、次のような伝承が残っている。「水城の西側で働いていた父と子が、土塁が出来上がったとの知らせに湧き起る喚声の中、いっぺんに力が抜けて、担いでいた土をその場に投げ出した。その土が不思議なことに土盛りのように盛り上がり、丘になった。」